

【まとめ】

それでは本日のフォーラムのまとめをご講演いただきましたお二方に専門家の立場からお願いしたいと存じます。まず初めに伊佐様お願いいたします。」

伊佐「皆さんお疲れ様でございます。ほんとに今日は、私もいろんなご報告を伺いまして大変勉強になりました。講演を聞かれてピンときたかもしれませんが、先ほど私が申し上げたかったのは、コロナ禍の中でそのコロナの対応なのか、経済なのかという話、両立するためにはどうすれば良いかと言われてましたが、どちらも結局は必要でした。それをうまく避けていくやり方、「正しく教える」ってありましたけども、そういう形でやる、やっていくしかない、ということもありました。経済の話をあえてしましたが、しかし経済だけで成り立っていくものじゃないと思います。やはり人とのうるおい、人間の心が絡んできます。

先ほど面白い話を聞いたんですが、大澤さんがアメリカに行って 2 回も隔離される目にあったと言われましたね。ほんとうにボロボロとなる、つらい経験をされたようです。私はそこまでの経験はしていませんが、その時にはやはり何か潤いのある文化芸術が必要なんだと思います。その文化といったときにまさに個人の体験も含めてそうですが、そういうことがあると心癒されると。そしてそれだけじゃなくて平時においても、質の高い地域っていうのはそれが必要だって話でした。一方では、私見るだけでもいいんですよ、という方もいらっしゃいます。よく言いますのが、スポーツをするのが楽しい人もいれば野球観戦、見ているだけで楽しいっていう方もあるし、両方楽しめればいいんですね。それが経済活動を活発にさせるところでもあるし、先ほど申しましたけどもクリエイティブな人物というのはそういうのを好むって言いましたけども、それを支える方も沢山、それこそ大澤さんの講演にあったようにボランティアっていうのが基盤になっているじゃないかとおっしゃってました。あ、なるほどと勉強になりました。そしてそれを裏付けるかのように、今日のお二人、行橋市の森さまと、それから吉富町の土屋さま、お二人とも現場からの本当に生の声を聴いて、正に諦めないだとか、どうやってでもやるんだというその意気込みですね、そして多分お一人じゃ無理なんですよ、それを支える方々、周りの人たちもその意気を感じてというか、私もそうしたいと、何もしないのはちょっとね、という気持ちがあったと思います。

大澤さんは、地元のボランティア活動をオンラインでやったといわれましたが、やっぱり 50 代ですよ。でもオンラインではないけども、直に会いながら、コロナも気を付けながら会って話し合っただけで進めていくと、何かやろうってそれに応じてくれる人たちもいるから、やっぱりできるのかなっていうような気持ちがあります。それは今までやってきたことがしみついている、自分の体にそれこそ文化となっている、文化って最も広い定義は人間の営みそのものなんだという人もいらっしゃるぐらいです。ほんとに幅広いんですけど

も、ですからそういうまさに皆さんやっていることっていうのが文化的な活動すべてと、お料理の話も言われていましたね、好みからして全部文化の影響があります。私もうちの奥さんに言われましたよ、ほんとあなたって豚肉が入ると「とっても美味しい」っていつも言うよねって。だからそういう文化的な影響ってやっぱりあるんですね。同じように、皆さんもそのこういう体に染み入っていくようなことをやってらっしゃると思います。

また一番最後の質問に出ましたけども、届いてほしい人に届いてないっていうところがあります。ですがそれはそっちの方で別の市場というか、別の世界があるんです。でも全体としてみるとまさに生物界と捉えるならば、もう一度言いますがやっぱり絶滅危惧種を絶滅させちゃいけないんです。だからそれなりにその皆さんと行政だけじゃなくて、皆さんで連絡会とか手を取り合っってこういう形は非常に大事だと思っています。

そんな感じで大変勉強になりまして、それともう一つ、あの仕組み良いですね、ボランティア養成講座、7回受講すると市民学芸員のメンバーになれるとか、こういう継続するためにそういうのやるっていうのもありますね。行政のバックアップが必要であるということですね。

それから今度は逆に土屋さんの場合は行政を突っつく、「これしてよ」というところが非常に大事なこと、やっぱりちゃんと要求するとか主張しないとですね。しかしなんでそれが通るかという、日頃やってくださっているからいつもお互い様とか、やってもらっているばかりじゃお返しせんと、というまさに文化なんです。それがあうちは、どんどんそれをお互い頼って頼られながらやっていくっていう考えが行政とか市民活動とか、垣根を越えていけるんじゃないかと思っております。

そこをどこでまた、どんなに発信するか、大学の中でもその役割があるのかなと思いますし、大澤さんと他のいろんなところでご活躍の時にこんな話も交えてして下さるとうれしいなと思っております。長くなりました。お疲れさまでした。」

司会「ありがとうございました。続いて大澤様お願いいたします。」

大澤「みなさんお疲れ様でした。ありがとうございました。活動報告のお二方の話から私の講評っていうとなんか上から目線でちょっと辛いんですけど、気づきがありました。行橋屋根のない博物館の森さんの話を聞きながら、コロナ禍だから出来ることをほんとに工夫されています。

それを僕なりに短い言葉で3つ言いますと、コロナ禍だから「学習する」っていうことですね。ボランティアの皆さん自身がコロナ禍だからそこで普段出来ないこと、新しく取り組まれた「学習」。それから「記録」ですね。文集、これ文集大事だと思いました。今までの活動を振り返ってそれを記録に残す。これってそのメンバーの中でも振り返って思い出したり、気づきがあったり、例えば5年前やったこと10年前やったこと思い出すと10年前やっていたこと、やっていた時に考えたこととちょっと違う気づきがあるは

ずです。今だからそうやって気付ける、あの時喧嘩したけどあれ良かったみたいなこととかね、きっとあるでしょう。「記録」が必要です。

3つ目はね、「協働」ですね。今まではそのボランティアの団体だけでやっていたのを開いて、それこそ行政の人と一緒にやったとか、違う別のボランティアの団体と繋がったとか、そういう形で他と繋がる、「協働する」一緒に。それはコロナ禍じゃなかったらもしかしたら相変わらず自分たちの団体だけで日々の活動に追われて学習も出来ずに、記録を取ることすら忘れて、やっていたのがコロナ禍で出来たってことはきっとあるだろうなと思います。さすが、コロナ禍だから出来ることをやっていたらよかったなと思いました。

次に「とんからりん文庫」の土屋さんのお話を聞いて、とっても素敵な、もう土屋さんの笑顔が素敵で若くて美しい笑顔を見ながらですね、コロナって本当に怖いと思う人にもいろんな差がありますね。とっても怖い人、さほど怖くない人がいたり、反応が全く分かれるわけですね。その時に「正しく恐れましょう」という話があって、そこにやっぱり丁寧にまず説明する。でそれで安心してもらう。安心してもらって前向きな笑顔がある、つまり何が言いたいかという、こういうコロナではあしななきゃいけない、こうしなきゃいけないというルールが増えて、マスクの着用しなきゃいけない、検温しなきゃいけない、しなきゃいけないというのが増えると、どうしてもしかめっ面になりますね。僕らの芸術祭もそういう感染防止策を検討しましたが、皆さん、だんだんしかめっ面になっていって、どこまでやるんだろう！という気持ちになってしまいました。何かこれやっちゃダメ、あれやっちゃダメっていうと、ほんと芸術祭やる意味あるのかな、ほんと楽しいのかという感じになったことがあったんです。だからそういう時に笑顔、やっぱりそれでも楽しくやるっていう笑顔を維持するっていうことがものすごく大事だし、この「とんからりん文庫」さんの活動の中でほんと表情っていうのを丁寧に大事にされていた。オンラインでも一応顔が見えるコミュニケーションツールはありますが、やっぱりその生、リアルで会って子供の表情、子供に表情を届ける、子供の表情を受け取るっていう、その表情とか身体的な情報っていうのはそれはオンラインじゃ届かない、受け取れないっていうことを再確認出来る話だったと思います。

活動報告はそんな感じで私もすごく勉強になりました。

最後のフリートークの中でもたくさん重要な質問をいただきましたし、その中でも私も気づきがありまして、伊佐先生にこうやって自分が話した内容を踏まえていただきながら僕も、生物の多様性と文化の多様性っていうことずっとなぞらえて考えているんですけど、なぞらえるというよりは同じ問題という、今度は最近強く感じていて、例えば生物、それこそ絶滅危惧種の多い、地球規模でいうと絶滅危惧種の多い地域は言語の危機でもあるんです。言語がそこで失われるかもしれない危機が絶滅危惧種の多い場所だということ最近知りました。それぐらい生物の多様性、文化の多様性っていうのは同じ組上にあることだと思います。

もしかしたらその行橋の活動なんて、ほんとにその危機じゃなかったのでしょうか。

屋根のない博物館の中で残そうとしてる建物であったり、古墳であったり、そこがどんどん荒れて行って竹やぶになって行って誰も訪れなくなったらほんとにそれは失われかねない、歴史も失われる。そうするといつのまにかみんなが Amazon で買い物するようになって商店街は消えちゃう、そうすると私たちが住んでる街は別にこの街じゃなくてもいいってことにどんどんなっていくんじゃないかと心配します。

そうなったらそりゃ便利な街にいったほうがいいよ、その方が安定した収入もある職にもつけるだろう、若者はどんどん減っていく。お年寄りしかいなくなる。どんどん活気がなくなってしまう。そうならない為には何が必要かって言ったときに僕は、やはり文化であったり芸術であったりするの、そこをそうじゃない別の地域とは違う街なんだっていうことを証明するものになるはずだと思います。

このコロナでほんとにこれまでと違う経済活動が、伊佐先生の話にもあったように経済の仕組み自体もほんとにこう大きな転換点だと思いますし、私たちの生活もこれからの不安をかかえていく、新しい不安に向き合わなきゃいけないときに、文化ボランティアの役割ってというのは決して小さくないと思います。その土地に住んでいる私たちが向き合わなきゃいけないものとか、これから頑張っていかなきゃいけないテーマというのは大きいよ、という話で講評にさせていただきます。ありがとうございました。」

司会「ありがとうございました。お二方からまとめとしてご講評をいただきました。

ご参加いただいた皆様、本日はフォーラムに最後までご熱心にお付き合いいただきまして誠にありがとうございました。各地域で活躍されていらっしゃる文化ボランティアの皆様にとりまして、コロナ禍の中、本日のフォーラムが活動を続けるヒントになったのであれば誠にうれしく思います。」